作品タイトル：最悪の友達

著者名：久仁島芽生

あらすじ：「私」にはひとりの友達がいる。わがままで勝手で、どこまでも自分本位な、かわいい女の子。バレンタインの日、ちょうど会うことになったから、チョコレートを用意していった。彼女は用意していなくて、その場で買った少し高いチョコレートをくれた。彼女は最悪の友達。最初で、最後で、最愛の友達。

本編の文字数：３３５０字

続けて三度鳴った通知音で目を覚ました。左まぶたのふちで小さく固まった目やにをこすり取りながら画面を見ると、真っ黒のアイコンから三件のメッセージが届いている。見慣れないアイコンだけれど、舞弥果（まやか）だとすぐにわかる。舞弥果はすぐにアイコンを変える。夕焼けの中に佇む自分の後ろ姿、薄ピンク色のフィルターがかかったかわいい女の子のイラスト、シンデレラ城越しの花火。前、一度だけ、私と一緒に撮ったプリクラだったこともある。

二月十四日、火曜日、午前三時十二分、今、十三分になった。トーク画面を開くと、短く『ねえ』『最悪』『通話したい』と並んでいて、返信する間もなくすぐに着信画面に切り替わる。出てみるとすぐに舞弥果の『ねええ！』という大声が聞こえた。

『最悪まじ推し不倫報道でてた、ねえどうしよ、ねえ最悪、しかもさ子供いたって、意味わかんなくない、結婚してるとか公表してなかったのに、子供、子供いて、五年だよ五年不倫してたって、ねえ』

舞弥果の推しは確かそれなりに人気のある俳優で、私は見ていないけれど今放送中のドラマにも出ていたはずだ。やや長く重い髪と整えられた口髭が特徴的で、どんな作品でもたいていい胡散臭い役柄を演じている。しかし、たまに番宣で出演するトーク番組などでの本人の言動や、彼と親交の深い同業者が語る私生活での姿からは、いたって真面目で仕事に対してまっすぐな性格であることがうかがえて、それがとてもかわいいのだと舞弥果はよく言っていた。

『だってさ意外と誠実みたいな感じでさやってきててさ、めっちゃ女遊びしてそうなのに全然ストイックみたいな、それで五年？　五年不倫？　でずっとさ、子供、奥さんいて子供いて？　はあ？　はあ？　はあ？』

叫ぶように言い立てる舞弥果の声がふいに止んだ。やばいね、となんとなく相槌を打つと、彼女はしばらく黙ってから『まじでさ』とつぶやいた。

『まじで、まじで、なんかさ絶対言っちゃいけないけどさ、死んでくれたりしたほうがよかった、事故とかで……まじで、ほら交通事故とかでさ死んじゃったらさ、よかった。そしたらだってさ、最悪だけどさしょうがないから諦めるけど、不倫だったらだって不倫したって生きてんじゃん、まださあ三十代だしさ長いよ。この先。こっからずっとさあ不倫なんだよイメージ。既婚者でさ子供、子供いてさ。ファンだって相手しかも。ねえ。もう。なんで？　なんでさあ、もうさあ、最悪、まじで、ねえ……』

舞弥果の怒りは、不倫をしたこと自体よりも、妻子の存在を隠していたことのほうに向いているように思える。私はベッドに寝転んだまま、枕の上に置いた液晶画面から放たれる光が暗い天井にぼんやりとした四角形を作るのを眺めていた。

小学校に入学したときから今に至るまで、舞弥果と私はうっすらとした友達どうしであり続けていて、それぞれ別の大学に進学した現在も、こうして彼女が一方的にＬＩＮＥやら何やらをよこし、私がそれに応じるという関係を保っている。明るく開放的な性格の舞弥果には私の他にいくらでも話し相手はいるけれど、彼女が推しの話を聞かせてくるのは決まっていつも私

だ。それは私と彼女が特別親しいということを意味するわけではなく、単に彼女の他の知り合いは彼女のするどうだっていい話にずっと黙って耳を傾けていてはくれないというだけのことだった。私だって楽しくて舞弥果の話を聞いているわけではない。ただ、私にとって生まれて初めてできた友達が彼女だったから、いつのまにかそれが当たり前になってしまっていたのだ。

『ほんとね、なんか、もう、無理だよね、無理。全部。やっぱ人は見た目で判断できないとかさ嘘だよね。まんまじゃんパッと見の。無理。ほんと無理』

舞弥果はなんでもかんでもすぐ好きになり、すぐ飽きる。今の推しの話をよく聞くようになったのは二ヶ月ほど前からだった。どうせ二日や三日もすればまた新しい誰かを愛し始めている。おととしの梅雨の頃、推しだったインディーズバンドのベーシストがどこかの踏切に飛び込んで死んだとき、舞弥果はさっきと同じように喚いていた。もう、麻薬やってても人殺してもいいから生きててほしかった、死なないでほしかった。それで翌週には若手芸人を推しにして毎日毎日彼が出演したバラエティ番組の感想を聞かせてきた。そんなことだって今となっては思い出しもしないのだろう。

舞弥果が大きくため息をつくのが聞こえた。

『ねえ今日ひま？　会お。カラオケ行こ。あたしあと服買いたい。新宿でいい？』

いいよと言うと『じゃ一時ね。東口』と返ってくる。それからしばらく話し、彼女の声にあくびが混ざってきた頃、私たちは適当に会話を切り上げて眠りについた。

四時間ほどで朝になった。顔を洗って服を着替えながら、冷蔵庫の中に昨日作ったブラウニーがあるのを思い出した。大学の春休みは長い。特に趣味もない私は、部屋の掃除や少し手の込んだ料理などで暇をつぶしている。自分で食べようと思っていたけれど、どうせなら舞弥果に持っていってあげてもいい。正午になる前に家を出て近所の百均でラッピング用の包装紙を選び、約束の時間よりもかなり早く新宿駅に到着した。Ｙｏｕｔｕｂｅとインスタを交互に見ながらしばらく待ったけれど、午後一時を過ぎても舞弥果は現れない。十五分くらい経ってから『今おきた！遅れる』とＬＩＮＥが来た。きっと一時間近く待つことになるだろう。私はルミネエストのエスカレーターに乗ってスタバへ向かった。舞弥果はどんな相手との待ち合わせにもだいたい遅刻する。私は慣れきっているけれども、付き合いの浅い友達とはそれが原因で仲違いをしたこともあるらしい。

キャラメルマキアートのトールをホットで注文し、窓際のカウンター席に座った。しばらくは飲まず、カップに両手を添えて指先を温める。窓ガラスの向こう側で風が吹いた。

舞弥果は誰とでもそこそこうまくやれる人だと思う。けれどそれは関係の深くない相手に限ってのことだ。彼女をよく知れば知るほど、決していいとはいえないその性格が目につくようになってくる。だから彼女と長続きしている友達はいない。ただひとり、私を除いては。

キャラメルマキアートを一口すすり、スタバで待ってる、と送ったトーク画面を閉じた。

私はどうして舞弥果と友達でいるのだろうか。これまで何度もそう考えかけてはそのたびに押し留めていた。それを深く考えなかったのは、きっと、舞弥果に負けず劣らずの醜さを持った自分に気づきたくなかったからなのだろう。舞弥果は、踏み込んだ仲になればあっという間に嫌われるような人間のくせに、知り合い程度の相手には好かれるたちだから、そんな彼女の一番の友達でいる私も周りからそれなりによく思われている。私は私欲のために舞弥果との付き合いをやめないでいるだけだ。けれど、それだけなら、本当にそれだけなのなら、彼女がその自己中心性のために人と仲違いをしたと愚痴を聞かせてくるたびどうしようもなく嬉しくなるのはどうしてだろうか。

午後二時九分、悠々と歩いてやってきた舞弥果は悪びれもせずにＡｉｒＰｏｄｓを外しながら「遅れたあ」と笑った。推しと仲のいい俳優がインスタライブで彼について話しているのを見ていたらしい。ブラウニーを渡すと、彼女は「まじ？　ありがと」と受け取り、ひとつ取り出して齧った。

「あ、おいし。なんか昔小学校のときも作ってたよね、あれめっちゃおいしかった」

そこで舞弥果はふと真顔になり「男にあげれば」と言って、それからすぐ笑顔に戻る。

「絶対うけるよ」

私は「ああ、ね」と応え、キャラメルマキアートを飲み干した。

スタバを出て階段で下へ降りる。すぐそばにＧＯＤＩＶＡがある。舞弥果はそのショーケースに寄っていき、チョコレートが数粒入った小箱を買って戻ってきた。

「はいこれ。ねえルミネのほう行こ。ルミネってジルあったよね確か」

「うん。たぶん」

彼女と並んで歩きながら、形にならない怒りのような思いが心に去来するのがわかった。外へ一歩出た途端、強い風が私たちの前を通り過ぎる。舞弥果の髪の匂いが顔を撫でた。ひどく甘かった。